

【平成27年 描き初め 事例】

- 92歳 女性 独居(持家)
- 夫は戦死し、子どもはいない。姉がいたが、10年前に亡くなっている。
- 糖尿病と診断され(80歳頃)、現在も内服治療中。
- 認知症はなく、主治医からはまだまだ頭は元気いっぱいと言われている。
- 3カ月前に外出先(買物)で転倒。意識がもうろうとしており、救急搬送される。
- 検査の結果、腰椎圧迫骨折と診断され入院。入院中はベッド上安静であり、ベッドサイドのポータブルトイレまで動く程度であった。頭部CTは異常なし。
- 主治医からは、内服を変更したことによる低血糖症状が転倒の原因だろうと説明された。
- 3週間ほどで骨折による痛みはほとんど消失し、退院となる。
- 入院前は杖も使わずに歩くことができていたが、退院後はT字杖を使っている。今まで杖を使ったことがないため、杖を使わずに受診し、主治医に怒られることが良くある。
- 転倒したことをうけ、大工をしていたキーパーソンの甥(姉の子)が自宅内に手すりを付けてくれた。甥は、亡くなった母親にできなかった親孝行代わりだと言って、親身になってくれている。
- 入院中は安静だったため、下肢筋力の低下がみられ、以前のように長い距離を歩くことができなくなった(セラピストは15mが限界だろうと)。
- 自宅では、寝室の隣にトイレと洗面所があり、そこまでは歩いて行けている。
- 入浴は、甥が見守ることで何とかできている。
- 人前で転倒し救急搬送されたことがショックで、受診以外で外出することがなくなり、「近所の笑いものだ。」「もうお父さん(夫)が迎えにすれば良かったのに。」が口癖となり、人と会うことも嫌うようになっている。
- このことから、甥の負担(買物代行、洗濯物、受診の付添い)が増えており口論になることが増えてきた。
- 食事は甥が買って来た弁当や総菜、カップ麺が主になっている。(入院前は自炊)
- 主治医は、閉じこもりがちな生活と食生活の乱れによる体重の増加と病状の悪化を心配している。

※記述がないものについては、「自立」または「支障なし」と考えて下さい。